様式2

# 平成30年度　自 己 評 価 表（最終）

鳥取県立八頭高等学校

| 中期目標（学校ビジョン） | 1　主体的に学び、自分の言葉で表現できる生徒を育成する。<br>2　チームで取り組む経験を通し、互いの多様性を知るとともに自己有用感を高める。<br>3　地域連携の主体となり、地域に根差した学校としての役割を果たす。 |
|---|---|

**今年度の重点目標**

1. 八頭高生らしい態度の育成　①家庭学習の習慣化　②学習と部活動の両立　③自治精神に満ちた活発な生徒会活動　④良好な人間関係が築ける生徒の育成
2. 生徒が主体的に学習する授業改革
3. 自らの進路を決定し、達成する能力の育成
4. 八頭地域の小中学校と連携し、地域貢献できる生徒の育成

| 年度当初 | | | | | 評価結果（3）月 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 評価項目 | 評価の具体項目 | 現状（平成29年度実績等） | 目標（年度末の目指す姿） | 目標達成のための方策 | 経過・達成状況 | 評価 | 改善方策 |
| 八頭高生らしい態度の育成 | 家庭学習の習慣化、学習と部活動の両立 | （1）83%の生徒が八頭高に入学して良かったと思っている（保護者91%）。<br>（2）97%の生徒が学校で定められたルールやマナーを守るよう心がけ（保護者96%、職員95%）、91%の生徒が授業の予鈴で着席する等、授業時間を大切にしている（職員96%）。また、79%の生徒が、八頭高は地域と連携した教育活動に積極的に取り組んでいると考えている（保護者77%、職員88%）。<br>（3）64%の保護者に、学校の生徒指導方針がよく伝わっている。<br>（4）自宅学習を毎日行っている生徒は50%（1年36%、2年42%、3年70%）であり、56%の生徒（保護者72%）が学習と部活動の両立を果たしていると考えている。スマホ利用時間調査（毎週1回通年）によると、1日当たり2時間以内利用は1年28%、2年32%、3年41%であり、22時以降に利用しない生徒は1年13%、2年18%、3年19%である。 | （1）八頭高に入学して良かったと思う生徒の割合(85%以上)<br>（2）ルールやマナーを守るよう心がけている生徒の割合(95%以上)<br>（3）学校の生徒指導方針が伝わっている伝わっていると回答する保護者の割合(70%以上)<br>（4）学習と部活動の両立を目指して、毎日自宅学習を行っている生徒の割合(60%以上) | （1）（2）（3）様々な機会やHP等を通じて、生徒指導方針を保護者に伝えるとともに、生徒・職員・保護者の緊密な連携により、自主性や自律性を育む生徒指導を行う。学校評価アンケートの結果を分析し、教育活動の改善に生かす。<br>（2）挨拶の重要性や公共マナーの遵守等について、教職員が同じ規準で粘り強く指導を続ける。スマホ利用調査を継続実施し、保護者との連携を図りながら長時間利用者の指導を継続する。<br>（4）クラス担任、教科担任、部活動顧問が連携して、自宅学習時間の確保を図る（部活動開始終了時刻の厳守、クラス担任・部活動顧問による自宅学習時間・進路志望等の把握・情報共有）。 | （1）79%の生徒が八頭高に入学して良かったと思っている（保護者91%）。<br>（2）98%の生徒が学校で定められたルールやマナーを守るよう心がけ（保護者97%、職員97%）、91%の生徒が授業の予鈴で着席する等、授業時間を大切にしている（職員95%）。また、76%の生徒が、八頭高は地域と連携した教育活動に積極的に取り組んでいると考えている（保護者79%、職員86%）。<br>（3）68%の保護者に、学校の生徒指導方針がよく伝わっている。<br>（4）自宅学習を毎日行っている生徒は54%（1年49%、2年44%、3年69%）であり、56%の生徒（保護者69%）が学習と部活動の両立を果たしていると考えている。スマホ利用時間調査（毎週1回通年）によると、1日当たり2時間以内利用は1年23%、2年16%、3年38%であり、22時以降に利用しない生徒は1年5%、2年6%、3年19%である。 | B | （1）（2）（3）学校評価アンケート（生徒・保護者・職員対象）結果、生徒・保護者の声を検討し、教育活動の改善に活かす。<br>（2）挨拶の重要性、公共マナー（公共交通機関利用時、登下校時等）の遵守等、全職員が同一規準で指導を続ける。スマホ利用調査を通年実施し、保護者との連携を図りながらルールづくりを図るなどして長時間利用者の指導を継続する。<br>（4）自宅学習と授業内容とが有機的に連動する工夫をしながら、自宅学習時間を確保させ、学習と部活動のより一層の両立を図るように、教科担当者、クラス担任が部活動顧問と協力しながら面談等の指導を継続実施する。 |
| | 自治精神に満ちた活発な生徒会活動、良好な人間が築ける生徒の育成 | （1）「八頭高愛し愛され運動」の参加者は第1回（6月）269名、第2回（11月）112名（別日程の2部活動を除く）であり、郡家駅までの登下校路、八頭高校前駅の清掃等を行った。また、生徒会執行部（卒業生1名を含む総勢7名）が睦前高田・石巻を訪問し（7月下旬）、4年半前に植えた桜の再訪、震災遺構・復興センター等の視察、NPO「桜ライン311」訪問・募金寄付を行い、その成果を翠陵祭（8・9月）で発表（梨花ホール）、写真・資料を展示した（アートスペースYAZU）。また、八頭町立小学校開校式（2校）における書道パフォーマンス・吹奏楽演奏・箏曲演奏、茶道部による保育所訪問、華道部による福祉施設訪問を行った。<br>（2）八頭高校体験入学（8月）には中学生518名、教員・保護者94名、八頭高ライフ体験（1月）には八頭郡内中学2年生全員196名が参加した。翠陵祭（8・9月）では、生徒が主体的に企画・運営を行い、達成体験を得ることができた。<br>（3）89%の生徒が、八頭高はいじめや差別を許さない実践力を育成する人権教育を推進していると考えており（保護者83%、職員85%）、90%の生徒が安全に配慮された教育を受けていると感じている（保護者85%、職員94%）。<br>（4）81%の生徒（保護者71%、職員94%）は、八頭高は心身の悩みに関わる相談について適切に対処していると考えている。 | （1）「八頭高愛し愛され運動」及び種々のボランティア活動への延べ参加者数(全校生徒の半数以上)<br>（2）中学生体験入学、翠陵祭、八頭高ライフ体験において、生徒が主体となって企画・実施に取り組む。<br>（3）八頭高ではいじめや差別を許さない教育が実践されていると答える生徒の割合(90%以上)。<br>（4）八頭高は生徒の心身の悩みに関わる相談について適切に対処していると回答する生徒・保護者の割合(生徒85%以上、保護者75%以上) | （1）「八頭高愛し愛され運動」等の独自の活動を通して地域社会から信頼されることで、八頭高生としてのアイデンティティーを育む。<br>（2）八頭郡内中学生に高校生活の魅力を伝える八頭高ライフ体験をはじめ、様々な行事を生徒自らの手で企画・実施することで、自己肯定感・有用感を高めるとともに、自らの生活や学びの在り方を振り返る。<br>（3）（4）hyper－QU、個別面談等を通して生徒の悩みを十分に把握するとともに、教育相談、特別支援教育、人権教育等のさらなる推進により、生徒が安心・安全な学校生活を送れるように支援する。 | （1）「八頭高愛し愛され運動」の参加者は第1回（6月）170名、第2回（11月）240名であり、全校生徒の半数を超えた。また、生徒会執行部で、11月には岡山県倉敷市真備地区でボランティア活動を行った。さらに、1月には、熊本県を訪問し、熊本大学災害復旧支援団体「熊助組」の大学生とボランティア活動に対して意見交換を行った。出張パフォーマンスでは吹奏楽部、書道部が6月には八東小学校で、11月には若桜町公民館祭に出演した。ほかにも華道部等多くの部活動が地域との連携を深めることができた。<br>（2）八頭高校体験入学（8月）には中学生583名、教員・保護者129名、八頭高ライフ体験（1月）には八頭郡内中学2年生全員199名が参加した。翠陵祭（8・9月）では、生徒が主体的に企画・運営を行い、達成体験を得ることができた。<br>（3）87%の生徒が、八頭高はいじめや差別を許さない実践力を育成する人権教育を推進していると考えており（保護者84%、職員78%）、90%の生徒が安全に配慮された教育を受けていると感じている（保護者94%、職員94%）。<br>（4）80%の生徒（保護者74%、職員92%）は、八頭高は心身の悩みに関わる相談について適切に対処していると考えている。 | B | （1）（2）「八頭高愛し愛され運動」、中学生体験入学、翠陵祭、探究活動、八頭高ライフ体験等を通して、地域課題解決の一助となるアイデアを積極的に出させる等して八頭高生としてのアイデンティティーを育む。<br>（2）八頭高生が主体となって八頭郡内中学生に高校生活の魅力を伝える八頭高ライフ体験（1月）を通して、自己肯定感・有用感を高めるとともに、自らの生活や学びの在り方を振り返る。<br>（3）（4）hyper－QU検討会、教育相談・特別支援委員会、教育相談係・保健係連絡会、人権教育LHR等を通して、より安心・安全な学校づくりをさらに図る。 |
| 生徒が主体的に学習する授業改革 | 将来にわたる主体的学習者の育成 | （1）8教科（芸術科を除く16名、延べ17回）において研究・公開授業を実施した。<br>（2）アクティブ・ラーニング及び高大接続改革に関する研修会（6月）を実施し、校外から8名が参加した。91%の職員が授業改革等に関する校内外研修会に参加し、全教科19名（延べ25回）が教科指導に関する県外各種研究会に参加した。<br>（3）1日当たりの自宅学習時間平均（11月）は、1年71分、2年77分、3年170分であり、1年2時間以上13%、2年3時間以上5%、3年4時間以上33%である。 | （1）（2）全教科で研究授業・研究協議を実施し、アクティブ・ラーニング等をはじめとする各種研修に教職員が積極的に取り組んでいる(校内外の研修・研究会に参加した教職員の割合90%以上)<br>（3）1日当たりの自宅学習の時間（それぞれ1、2年90分、3年200分以上） | （1）（2）全教科で研究授業・公開授業を実施し、予習・復習の定着、学力向上等につながる学びを促すために、アクティブ・ラーニング型授業方法を検証する。高大接続改革に対応するために、県内外各種研修会に積極的に参加し、教育活動に還元する。<br>（3）クラス担任による面談に加えて、教科担当者による面接指導・教科指導により具体的かつ効率的な学習指導を行う。また、土曜自習・質問教室、放課後自習室等を通して主体的な学習を促し、進路目標を達成するための自宅学習時間を確保させる。 | （1）7教科（9名）において研究・公開授業を実施した。<br>（2）アクティブ・ラーニング及びICT活用に関する研修会（10月）を実施し、校外から12名が参加した。91%の職員が授業改革等に関する校内外研修会に参加し、13名が教科指導に関する県外各種研究会に参加した。<br>（3）1日当たりの自宅学習時間平均（11月）は、1年82分、2年64分、3年174分であり、1年2時間以上21%、2年3時間以上2%、3年4時間以上35%である。コース別・学年別の自宅学習時間は体育コース（1年32分、2年19分、3年30分）、1年探究・総合コース90分、総合コース（2年63分、3年156分）、探究コース（2年89分、3年308分）である。 | C | （1）（2）全教科において研究・公開授業を実施し、予習・復習の定着、学力向上等につながる学びを促すために、アクティブ・ラーニングを実践・検証する。高大接続改革に対応するために、県内外各種研修会に積極的に参加し、教育活動に還元する。<br>（3）クラス担任が面談で自学、自習の状況についてフィードバックを行い、教科担当者による面談を実施し、未習分野領域に興味を持たせるなどして、より具体的かつ効果的な学習指導を行う。 |
| 自らの進路を決定し、達成する能力の育成 | キャリア設計、進路決定と自己実現 | （1）進路を実現するために目標に向かって努力している生徒（10月）は、1年60%、2年64%、3年92%である。<br>（2）進路志望未定者（11月）は、1年6名（4月63名）、2年3名（1年4月11名）、3年0名（1年4月54名）である。<br>（3）国公立大学志願者（11月）は、1年155名（4月127名）、2年146名（1年4月159名）、3年110名（1年4月149名）である。大学入試センター試験受験者は158名（総合・探究コースの68%）であり、前年比9%減し、国公立大学合格者は47名（過卒生を含む、昨年度51名）であった。 | （1）進路実現に向けて努力している生徒の割合（それぞれ1年65%、2年70%、3年95%以上）<br>（2）進路志望未定者がなくなり、すべての生徒が自分の進路を実現するために努力している。<br>（3）国公立大学を志望する割合が増加し、国公立大学合格者は60名を超えている。 | （1）（2）（3）キャリア教育関係の各種行事を効果的に実施するとともに、クラス・教科担任による面談指導等を適宜実施することによって進路意識を明確にする。また、学部学問研究を充実させ、具体的な進路目標に向かって努力する生徒を育成する。<br>（3）定期考査等の分析を通して生徒個々の理解度を的確に把握するとともに、分析結果を日頃の授業にフィードバックさせることで学力の向上を図る。また、補習や勉強合宿等の行事の効果的な実施を通じて、国公立大学に合格できる学力を身につけさせる。 | （1）進路を実現するために目標に向かって努力している生徒（10月）は、1年69%、2年63%、3年93%である。<br>（2）進路志望未定者（10月）は、1年15名（4月34名）、2年2名（1年4月63名）、3年1名（1年4月11名）である。<br>（3）国公立大学志願者（10月）は、1年127名（4月126名）、2年127名（1年4月127名）、3年113名（1年4月159名）である。大学入試センター試験受験者は144名（総合・探究コースの61%）であり、前年比6%減であったが、本年度は多くの生徒が5教科型で受験した。 | C | （1）（2）（3）キャリア教育全体計画に基づき、「夢ナビ」ライブ、進路講演会、進路学習「大学生に聞く」、長期休業中補習、勉強合宿、定期考査前錬成補習、土曜自習・質問教室、土曜サテライン授業等を実施し、学力向上を通して進路実現をより確かなものにしていく。<br>（3）大学・学部・学問研究の充実によって、それぞれの魅力を伝え、何を学びたいかを考えさせ、具体的な進路目標に向けて努力するように指導する。 |
| | 各コース（探究・総合・体育）の活性化 | 【探究コース】探究ゼミ（2年、通年）では、公立鳥取環境大学教員の講演（5月）、企業家訪問（6月）と並行して個別ゼミによる研究活動が行われ、中間発表会（10月）、最終発表会（1月、15分野）を開催した。また、鳥取大学体験実習（11月）を全学部9コースで実施した。<br>【総合コース】広島研修旅行（9月・2年）において、クラス・生徒の興味・関心にあわせた企業・大学等研修を実施し、進路意識を高めた。<br>【体育コース】体育コース集会（毎月）、オリエンテーション合宿（4月）、郡家東・西小学校スポーツテスト指導（6月）、コンディショニング講習会（6月）、パラリンピック選手講演会（7月）、臨海実習（7月）、集団行動（9月）、バランス改善エクササイズ（10月）、エアロビック講習会（11月）、ウェイトトレーニング講習（11月）等の特色ある行事を実施した。体育コース生の全国大会出場は24名（延べ36名）であり、探究・総合コースは17名（延べ28名）であった。 | 【探究コース】生徒自らが課題を見つけ研究テーマを設定する積極的な探究ゼミが行われているとともに、鳥取大学体験実習が全学部で実施されている。<br>【総合コース】研修旅行（企業・大学等研修）が、生徒の進路意識を高める日程・内容となっている。<br>【体育コース】全国大会出場者が30名以上であり、学校生活、部活動をリードしている。 | 【探究コース】鳥取環境大学、企業、地域等との連携を図り、探究ゼミのより一層のレベルアップを図る。鳥取大学との連携を密にして、体験実習を全学部で実施する。<br>【総合コース】多様な進路志望に対応するために、工夫された進路LHR等によって進路意識を向上させる。<br>【体育コース】特色ある行事を継続実施し、学習面、生活面の充実を図り、学校生活、部活動のリーダーとしての自覚を促す。 | 【探究コース】探究ゼミ（2年、通年）では、公立鳥取環境大学教員の講演（5月）、企業家訪問（6月）と並行して個別ゼミによる研究活動が行われ、中間発表会（10月）、最終発表会（1月、16分野）を開催した。また、鳥取大学体験実習（11月）を全学部9コースで実施した。<br>【総合コース】広島研修旅行（9月・2年）において、クラス・生徒の興味・関心にあわせた企業・大学等研修を実施し、進路意識を高めた。<br>【体育コース】体育コース集会（毎月）、オリエンテーション合宿（4月）、郡家西小学校スポーツテスト指導（6月）、コンディショニング講習会（6月）、臨海実習（7月）、集団行動（8月）、バランス改善エクササイズ（10月）、エアロビック講習会（11月）、ウェイトトレーニング講習（11月）等の特色ある行事を実施した。体育コース生の全国大会出場は36名（延べ65名）である（探究・総合コースは25名、延べ46名）。 | B | 【探究コース】大学、企業、地域等との連携をより緊密にし、探究ゼミのレベルアップを図る。<br>【総合コース】多様な進路志望に対応するために、工夫された進路LHRや面談等によって進路意識を向上させる。<br>【体育コース】体育コース集会等、特色ある行事を実施し、学習面・生活面の充実を図る。 |
| 地域貢献できる人材の育成 | 八頭地域の小中学校等との連携推進 | （1）数学授業研究会（6月、八頭郡内中学校・本校教員参加、研究授業・研究協議会）、夏季特別勉強会(7月・12月、八頭郡内中学生と本校生参加)を実施し、八頭郡内中学校と連携を図った。<br>（2）文科省英語教育強化拠点事業による授業研究会（7月、11月）を実施し、小中高の英語教育実践について研究協議を行った。文科省全国連絡協議会（1月）、広島県立賀茂高校（2月）において、研究成果を発表した。 | （1）中高の現状を把握し、中学生と高校生の学び合いを通して学力向上を目指している。<br>（2）小中高の課題を共有した上で、小中高の連続した学びをレベルアップさせるために、効果的な指導法を研究・実践している。 | （1）八頭地区スクラム事業（平成26～28年度）を引き継ぎ、中高合同授業研究会、八頭高ライフ体験、長期休業中の特別勉強会等の継続実施によって、中高連携による授業力向上、学力向上を図る。<br>（2）文科省英語教育強化拠点事業の研究成果等を踏まえ、効果的な小中高連携が実施されている。 | （1）数学授業研究会（6月、八頭郡内中学校・本校教員参加、研究授業・研究協議会）及び夏季特別勉強会で、八頭郡内中学校3年生を対象に数学を実施し八頭郡内中学校と連携を図った。<br>（2）冬季特別勉強会を八頭郡内中学校2年生を対象に、今回初めて英語で実施した。 | B | （1）（2）中高合同授業研究会、八頭高ライフ体験、特別勉強会において、中学生や教員がより参加しやすいように実施時期や対象を検討していく。 |

評価基準　A：十分達成〔90%〕 B：概ね達成〔80%程度〕 C：変化の兆し〔60%程度〕 D：まだ不十分〔40%程度〕 E：目標・方策の見直し〔30%以下〕